HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世の知と文芸［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙尾, 祐太
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13839号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78694
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuta_Takao_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：髙　尾　祐　太

審査委員　主査　教　授　金　沢　英　之
副査　准教授　野　本　東　生
副査　准教授　林　寺　正　俊

学位論文題名
中　世　の　知　と　文　芸

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、中世の文芸、とくに従来秘儀や口伝に覆われた荒唐無稽な言説の最たるものとして扱われてきた古今伝授に始まり、和歌とともに中世における韻文の一大潮流をなした連歌に関する心敬の歌論、それに関連して無住の説話や空海の言語観、さらには平家「剣巻」へと広げてゆくかたちで、それらの多岐に亘る分野の文芸を成り立たせていた共通の知的・思想的基盤を探り、そこに『大乗起信論』（以下『起信論』）に淵源する世界観が広く共有されていたことを明らかにした。中世日本における『起信論』の重要性は、これまでもさまざまなかたちで指摘されてきたことであるが、それが文芸作品のどのような表現に現れているのかを具体的に、かつここまでの深度で示してみせた論はこれまでになかったのではないか。たとえば、執筆者は『起信論』を読むにあたり、その注釈である『釈摩訶衍論』のみならず、さらに『釈摩訶衍論』に対する複数の古注釈まで精査することで、それが当該の時代にどのように理解されていたかを実証し、恣意的な理解を排する態度を徹底している。そうした、地道な読みの積み重ねにこそ、この論文の大きな価値がある。

『起信論』的世界観は、日本だけでなく中国・朝鮮を通じた東アジア世界全体で広範な影響を及ぼしたものだが、日本の場合、そこに空海の持ち込んだ言語哲学などが重なってゆくことで、いわば「ことばの哲学」あるいは「名の哲学」とでもいうべきものが形成されていったこと、その結果、文芸領域との親和性が非常に大きなものとなっていったことを探りあてた点も、この論文の重要な成果であろう。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、第一部が古今伝授、第二部が心敬の連歌論を中心に論じたものだが、双方が古今伝授の始発に位置する宗祇という人物に収斂してゆくことを示し、ともすればバラバラになりかねない各部分をうまくまとめることに成功している。その結果、全体を読み通すことで、個々の論文を個別に読んだとき以上の面白さを感じさせるものとなった。個別の論は緻密で微細な分析にもとづきながらも、全体として大きなテーマを描き出すことに成功していると評価できよう。

特筆すべきは、全六章のうち五章がすでに全国誌に発表済みであり、残る一章も現在投稿中であることで、本論文が専門的に見て高い水準にあることを示している。

一方で、審査の席上、個別の資料の解釈や引用の体裁面ではなお改善の余地があること、中世の知の基盤として『起信論』的な世界観が選択された理由をさらに追求すべきであることなどの指摘

がなされた。とはいえ、これらの指摘は本論文の本旨と結論に大きな影響を与えるものではなく、それによって本論文の価値が損なわれることはない。

以上の審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。